

示準語 *intellectuel* の形成

ジャン・ポール＝オノレ

フランス語で *intellectuel* (知識人) という名詞がある種の仕事または社会参加を特徴とする一群の人々を指す語として拮がったのは、政治的言説をしてであった。

とくにこの語が使われるようになったのはなぜか? いかなる意味をもって使われたのか? 何ゆえにこの語が G. マトレ のいう「示準語」であると言いうのか?

新聞『オーロール』に「知識人宣言」が掲載されたとき、この語はすでに政治的な意味あいをもっていた。そして一部の人は悪い価値を与えて使う語であった。しかし、この語をひろめたのは——ドレフュス大尉を擁護する大学教授、文筆家、学者である。かくして、言葉/行動、科学/本能、合理主義/民族主義 などの論争を通じて、知識人たちは自らの力を知り、自らの集団的アイデンティティを作りあげ、自分たちに真に相応しい名前を手にいれ、それに伴うコノテーションを獲得したのである。

それは実質的に、ことばの横領と言ってよい現象で、反ドレフュスの右翼には都合の悪いことであった。しばらく躊躇の期間があったのち、民族主義者の政治的発言の中では、この *intellectuel* という語は悪い意味をもって使われることが固まる。より一般的に言うなら、政治的言説のすべてで、*intellectuel* という語は *dreyfusard* (ドレフュス派) のシノニムになってしまう。

この *intellectuel* という語は、(上に述べた意味において) 新しい社会的現実の所産であり、また「一つの文化的事実をよく表すとともに明白なその要素」(G. マトレ) であった。そして今世紀のはじめ、さまざまな政治的言説の中で意味を明確にしていっただのである。長期間にわたって、ドレフュス事件の遺産であるさまざまなイデオロギーの意味合いを保ち続けた。その内容は話者によって異なる。しかし一般的に、*intellectuel* という語の概念領域に *réaction* (反動) という語を入れようと、*subversion* (反体制) を入れようと、共和派のキー・ワードを入れようと、それらのコノテーションには共通のものがある。それは(職業的地位や、知性の質の高さを越えて) 社会参加(アンガージュマン) への使命感である。